

平成30年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立海津特別支援学校

学校番号

111

自己評価

<p>学校教育目標</p>	<p>児童生徒がもつ可能性を最大限に伸ばすことができるように (1) 児童生徒一人一人の障がいの状況や、発達段階等に応じたきめ細かい教育を行う。 (2) 仲間と共にくましく、明るく生きる力を育む。 (3) 一人一人が社会自立に必要な基礎的・基本的な知識・技能を培う。</p>
<p>評価する領域・分野</p>	<p>◇「自立」に向けた力を育成するための指導・支援の在り方</p>
<p>現状及びアンケートの結果分析等</p>	<p>上記の領域・分野は、全校の研究テーマで、継続して全校で実践研究を進めているところである。 教職員に関する保護者等を対象とするアンケート項目では、「学校の先生は、児童生徒の実態を的確に捉えている。」「学校の先生は、専門的知識が豊かで教師としての資質を身に付けている。」について「よくあてはまる」と「ややあてはまる」の合計が70%台、また、「実態を的確にとらえている」に関しては「あまりあてはまらない。」が11%と高くなり、この3年間で評価が一番低くなった。授業に関する項目でも「授業内容や進度が実態に即している。」「一人一人に合った教材教具が準備されている。」に対して「わからない。」が15%以上で高くなった。これは教員の専門性について物足りなさを感じているということである。今年度は授業デザインを大切にして、特に支援環境に焦点をあて、職員が話し合う場を多く設定できるように学校全体で工夫している。このことが職員の専門性の向上につながり、そして保護者にも伝わるようにしていきたい。</p>
<p>今年度の具体的かつ明確な重点目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自立に向けた力を育成するための指導・支援を工夫する。 ・児童生徒の実態からねらいを明確にし、部内又は部を超えた指導・支援の実践交流を積み重ね、各部での取組を確認し、授業づくりに反映させることで児童生徒の自立に向けた力を育む。
<p>重点目標を達成するための校内組織体制</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの生活単元学習の研究で得られた成果を他の教科、領域に広げられるように各学部で焦点を当てる教科・領域を決めて進める。 ・部別において、略案授業の事後研究会を行い、授業ポイントの有効性について検証し、部内での再確認と共通理解を図る。 ・全校を6つの縦割りグループに分け、実践交流を行うことで、日々の支援・指導を確認する。
<p>目標の達成に必要な具体的取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の成果と課題をもとに、授業関係者全員でアイデアを出し合い、KJ法等でまとめながら単元計画を立てる。(TTによる授業デザイン) ・昨年度までの研究で確認した授業のポイントを参考に、支援環境に焦点を当てて話し合う。「わかりやすい環境づくり」「できるための支援ツール」「教師の働きかけ」「児童生徒の動き」の観点を意識して授業実践をする。 ・12月に高等部の作業学習の授業公開を行い、外部講師を招いた研究会を実施することで、年2回全員が参観する全校公開授業を行い、事後研究会では全員での小グループ討議とし、授業者が各グループに入るように縦割りでグルーピングする。その記録は全員で回覧し、共通理解を図る。
<p>達成度の判断・判定基準あるいは指標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の満足度や充実感の把握 ・保護者からの意見・感想 ・学校評議員等からの意見 ・部内における授業の教員相互の事後評価 ・平成30年度年間指導計画案、単元計画一覧表案の完成

取組状況・実践内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・どの学部も単元等の初めに授業デザインを行い、ねらいや指導・支援等について、関わる職員間で共通理解して進めた。 ・各部ごとに効果的な支援環境について整理し、「わかりやすい環境づくり」「できるための支援ツール」といった物的支援環境を意識し、児童生徒の主体的に活動する姿が見られるような授業づくりをした。 ・12月の全校研究会では、高等部の手芸班で研究授業を行った。研究授業前に数回にわたって大学の先生から指導助言をいただき、授業改善を重ねた。授業を通して、生徒の自立への姿に迫る支援環境の工夫を、全職員で確認することができた。 ・縦割りグループ研究では、他の部の取組を知ることができ、どの年齢でどのような狙いで授業づくりに取り組んでいるかが分かった。
評価の視点	評価
<p>① 授業デザインを通して、授業にかかわる職員間でねらいや指導・支援について共通理解して授業を進めることができたか。</p> <p>② 部別研究会を通して各部で効果的な支援環境について整理し、「わかりやすい環境づくり」「できるための支援ツール」を意識した授業づくりができ、児童生徒の主体的に動く姿につながったか。</p> <p>③ 全校研究会では卒業後の豊かな生活につながる生きる力について話し合い、具体的に上げた4つの力ごとに実態把握をし、目標を設定して授業を行い、実践を通して授業改善を図ることができたか。</p>	<p>Ⓐ B C D</p> <p>A Ⓑ C D</p> <p>A Ⓑ C D</p>
成果・課題	総合評価
<ul style="list-style-type: none"> ○授業デザインを行うことが定着しつつあり、ねらいや指導・支援等について、関わる職員間で共通理解して進めることができた。 ○授業者側は気付かなかった支援環境や配慮について意見交換することができ、次の実践につながった。 ●個々の児童生徒への指導支援の評価を行い、適切な支援を検証し、次の実践につなげていく必要がある。 ●人的支援環境の中でも特に「教師の働きかけ」について、職員一人一人がどのような支援がよいのかを理解し、役割分担をしながら取り組んでいく必要がある。 	A Ⓑ C D
来年度に向けての改善方策案	<ul style="list-style-type: none"> ・より適切な支援をしていくために、単元の途中にかかわる職員で「ねらいは適当であるか」「適切な支援なのか」等の評価を行い、ねらいに迫るために必要な支援環境を検証し、実践するPDCAサイクルでの授業改善を行っていく。 ・全校研究会等、他の部との意見交換を行い、児童生徒に必要な力とその支援について深めていく。

学校関係者評価 (平成31年2月4日実施)

<p>意見・要望・評価等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの授業も楽しい。先生方の授業が楽しい。先生方が子どもたちを育てよう、伸ばしていこうと考えて、子どもたちに興味をもたせるような話し方で授業づくりをしていることがはっきりとわかる。 ・先生方は、子どもに無理やりさせるのではなく、できるように支援している。一人一人の能力、進度、ペースに合わせて焦らずに指導に当たっている。その結果、子どもたちが成長している。 ・学校評価に関するアンケートで「わからない」と答えているのは、特に高等部になると送迎等もなくなり先生方と話す機会も少なくなるからだと思われる。PTAがよく動いていて、学校と連携しながら活動を進めている。様々な機会を通して、学校の教育活動を伝えていくとよい。
--